

がん終末期療養者のスピリチュアルペインに対して 訪問看護師が実践するケア

日坂 春香 中村 祐紀 刃之原 美津妃

杏林大学保健学部看護学科看護学専攻

この度、第7回学生リサーチ賞を受賞させていただき大変光栄に存じます。ご選考いただきました選考委員の先生方、ならびに杏林医学会役員の先生方、関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

今回の学生リサーチ賞の受賞対象論文は、卒業研究論文「がん終末期療養者のスピリチュアルペインに対して訪問看護師が実践するケア」です。

がん終末期においては、全人的苦痛の緩和が重要です。中でも、スピリチュアルペインは目に見えない苦痛であり、看護支援を行う上で、困難さ、不確かさがある一方で、スピリチュアルペインに対してケアを行うことは、その人らしく最期を迎えられるためには重要なものと考えます。

がん終末期療養者のスピリチュアルペインに対するケアは、病棟と在宅療養では違いはないと言われています。しかし、在宅におけるがん終末期療養者は死までの時間が限られています。加えて訪問看護師が療養者と関わる回数や時間が限られているため、早期に療養者のニーズを捉え、質の高いケアを行う必要があると考えました。そこで、がん終末期療養者のスピリチュアルペインに対して訪問看護師が実践するケアについて明らかにすることを目的とし、研究を行いました。

研究方法は、半構成的インタビュー調査による質的研究です。対象者は病棟勤務歴があり、訪問看護歴が3年以上で承諾の得られた訪問看護師としました。分析は質的帰納的に行い、インタビュー結果から逐語録を作成し、訪問看

護師のスピリチュアルペインに対するケアについての語りを抽出し、コードとしました。類似・共通したコードをサブカテゴリー、カテゴリーとしました。

4名の対象者に質的にインタビューをした結果、53のコードが導かれ、15のサブカテゴリー、5のカテゴリーが抽出されました。カテゴリーは【療養者との関係性を構築】、【療養者の生きる希望を支える援助】、【在宅療養という環境での時間を工夫した援助】、【家族の不安緩和と療養者との関係性を保持】、【看取りのための心の準備や意思表示の促進】でした。

訪問看護師はがん終末期療養者のスピリチュアルペインに対して、療養者と家族との信頼関係の構築を基盤として関わっていると考えられました。そして、信頼関係を基盤に、家族が抱える不安の緩和や療養者と家族の関係性の保持や、限られた訪問時間の中で医療処置や身体ケア以外の時間を確保できるよう家族との役割調整などを行うことが重要であると考えました。これらのケアを継続して行い、さらに看取りのための心の準備や意思表示の促進に対して重点的に関わることで、死への恐怖の緩和や本人の望む最期を迎えることに繋がると考えられました。

最後になりましたが、本受賞論文の研究を行うにあたりご協力をいただきました訪問看護ステーションの訪問看護師の皆様、ご指導いただきました保健学部看護学科看護学専攻中島恵美子教授はじめ、在宅看護学研究室の先生方に感謝申し上げます。